

一次の文章は、「僕」(「緑デミ」)の視点で描かれた小説です。これを読んで、後の問に答えなさい。

亨の同級生の圭一君がやってきたのは、平日の夕方だった。うつすらと暗くなり、子供が歩いても良い時間帯からは、ずれているように僕は思った。

1 圭一君は望月家の門までやってくると、数分そこでうろろし、インタ―ホンを押すか押すまいか悩むそぶりを見せた。

「何やってんだ、こいつは」とザッパが呆れる。

「亨に会いに来たんだから、さつきと呼び出せばいいのに」

僕とザッパで、逡巡しながらうろろする圭一君を眺めていると、玄関が開いた。良夫が出てきた。駐車場のチェーンをいじくり、僕の鍵を開ける。そしてそこで、良夫は、外に立つ圭一君に気付き、「あ、亨の友達か？」

と言う。「ちよつと待つてろ。呼んできてやるから」

あ、いえ、うん、と圭一君が言い淀むうちにも良夫は家に戻り、亨を呼んできた。

「圭一君、どうしたの」と亨は例によつて、落ち着き払った言い方をする。

「ほら、お兄ちゃん、圭一君ってあの、この間のファミレスのガラスの時に」

「あ、ああ、あの時の」良夫は思い出したらしく、手を叩く。お洩らしのことを忘れたわけではないのだろうが、口にしない。「あの後、お母さんに怒られなかったか？」

「あ、いえ、うん」圭一君はやはりもじもじとしていた。

「偶然だな。俺、今からあのファミレスに行くんだよ」良夫が言う。

あ、そうなの？

「あ、そうなの？」亨も知らなかったらしく、小さく驚いた。

「え、そうなの。また何か」と圭一君は怯えた様子だった。

「単に食事に行くだけだよ」良夫はなぜか、照れ臭そうになった。嘘をついている気配もあり、何やら誤魔化すようでもあったが、そのまま僕に乗り込んでくる。ファミレスに行くことはそれほど後ろめたいことでもないだろうに。

ただ僕はその良夫の態度よりも、圭一君が何の用事で、亨に会いに来たのか、そちらのほうが気にかかったが、すでにエンジンがかかってしまう。

「ザッパ、亨たちがどんな話をしていたのか後で教えてくれよ」僕は発進す

ると同時に、言い残した。

「まあ、そうだな。もし聞いたら、な」ザッパが気乗りしない声で答えるが、それもすぐに遠ざかる。

良夫はファミレスの駐車場に僕を停めると、店内に入っていく。いったい何の用事があるのか。平日の夕方だからなのか、車はほとんどいなかった。ぼつりぼつりと離れて停車している。

「やあ緑デミ」と声をかけてきたのは、ヴィッツだ。見れば、隣の隣に停まっている。彼の持ち主、瑠奈さんがバイト中なのだろう。親しいわけではないが、やはり、知っている自家用車から声をかけられるのはほつとする。(中略)

「もう一つ？」

「気になることが二つあると言ってたじゃないか」

「ああ、そうだった」ヴィッツは少し明るい声を出し、「実はそっちも、君が関係しているんだ」と続ける。

「そっちもか！」僕は緊張する。

「ほら、それは君の持ち主の話だよ。さつきも君を運転してきた」

「良夫が？ 何か迷惑をかけたかったのかな」

「2 まあ迷惑と言えば迷惑に分類できるんだけど、もしかすると、うちの瑠奈さんに好意を抱いているのかもしれないぞ」

僕はすぐには意味が分からず、黙ってしまふ。

「この間の、ガラスの事件で、店に来ただろ。で、おそろく、『弟が迷惑をおかけしました』と店長に頭を下げた。隣に瑠奈さんもいたんだろ。そこで、惹かれたんだろな」

「そんなに簡単に？」「瑠奈さんは魅力的だからな、普通の男ならすぐ虜だ。普通なら、な。で、この間、瑠奈さんがバイトに来た時と入れ違いで、おまへの持ち主が店から出てきて、すれ違う時には、ぼーっとなっていたぞ」

自家用車の最奥目もあるから、僕は話半分に聞く。「でも、良夫がここに来たのは、あの時以来、今日が初めてだけだ」

「いや、何度か友達の車で来ている」

「僕の知らないうちに！」

「その通りだ。緑デミ、大事なことを忘れちゃいけない。人間たちは、自家用車以外の車でも移動できるんだ」

「あいつらは、圭一君の情けない名場面を録画している」

「ガラスを割って、怒られたり、小便を洩らしてしまったりしたところを。

でもさ、そんなの、僕たち自家用車でいえば、マフラーから4水が垂れているようなものだし、気にすることはなさそうだけれどね」

「引火するわけでもないしな」

「そう」「まあ、人間にはいろいろあるんだろう」「自尊心とか、羞恥心とか？」

「で、どうやらあいつらは、おまえのこの次男に見せたのと同じように、圭一君にもその録画映像を見せたらしい。」

「遅い前方車両をパッシングするように」

「ただ、もうさすがにこのままでは駄目だ、と思ったんだろう」

「駄目？」

「あいつらの言いなりになっていても、自分の道は暗いままだと気付いた。暗い道を不安のまま行くよりも、自分のライトを点けて、自分の道を行くべきだ、と」

僕は、圭一君が耳たぶを捻ると、目に白色灯が光る、といった場面を思い浮かべた。

「まあ、ようするに、あいつらから何か命令しても断固拒否する、つてそういう決心をしたんだろうな。圭一君としては大いなる抵抗だ。そしてそんなれば、あいつらもきつと、怒るだろう」

圭一君を取り囲み、おまえそんな態度を取っていいのか、俺たちの言うことを聞かないようならば、例の録画映像を、あのガソリン洩れてる場面を、世界に公開してしまうぞ、と脅しつける。そんな光景が思い浮かぶ。「でも、圭一君は何でそれを亨に言いに来たんだろう。わざわざ宣言しに？」

「5 俺たちは運転手にアクセルを踏まれれば前に行くが、人間は前に行きたくても、自分で自分のアクセルを踏まないと決けない。決心するにも自分ひとりで無理な場合があるわけだ。びびっている時はアクセルを踏む勇気がないからな。他人に後ろから押してもらいたい」

「うちの亨に？」

「そうだ。もしくは、バッテリーが切れた時に、別の車両にブースターケーブルで、充電させてもらうのと似たようなものか」

「亨は何て」

「まあ、おまえのこの次男のことだから、冷静に、『無理しないように』とでも言うのかと思っただけだ、意外にも、後押ししてたぞ。『圭一君、が

君のこのころの瑠奈さんだつて君の知らない時に君の知らない場所に移動しているかもしれないぞ、と言つてやりたくなる。が、我慢した。言い合いは不毛だ。

でも実際、今の良夫が、ファミレスにわざわざ一人で食事に来たのだとすれば、その理由は瑠奈さんにある、という話も否定できない。先ほどの、僕に乗る際の、悪いことでも目論んでいるかのようなきこえは、それが故だったのか。

「けなげだな、良夫」と僕は感想を口にする。

「まあ、もし、万が一、瑠奈さんと君のこのころの長男が仲良くなった時には」ヴィッツが改まった調子で言った。

「うん」

「どちらの車でドライブに行くことになつても、恨みつこなしだ」

もちろん、と僕は答える。同時に、いつ良夫に恋人ができるのか分からぬが、自分が望月家にいるまでの間にその時が訪れるのだろうか、と考えてしまふ。いつまで僕は、あの家にいられるのだろうか。何を弱気に暗いことを考えているのか、と我ながら苦笑したくなる。縁起でもないことを想像してはならないが、縁起でもないことを思い浮かべること自体が何か、不吉な予兆と言えるのかもしれない。

良夫のファミレス通いはそれから、数日続いた。夕方になると僕を運転し、ファミレスに行き、いったい何を食べてくるのかは分からぬが、帰ってくる。その間、僕はヴィッツとどうでもいい話を交わした。

「そういえば、圭一君はどうやら、立ち上がるらしいぞ」ザッパが言ったのは、三日くらい経った頃だ。「この間、圭一君がおまえのこのころの亨にそう言っていた」

「あれ、それつて三日も前のことじゃないか」良夫の恋路が気になるため、僕も忘れていたのは事実だが、ザッパの発言も唐突に思えた。

「すっかり言うのを忘れていた」と彼は3 飄々と答える。

「立ち上がる、つて、じゃあ、圭一君は今まで、座っていたわけ？」

「大仏じやあるまいし」ザッパはすいぶん前に、細見氏の運転で鎌倉まで出かけたことがあるらしく、自慢げに言う。「まあ、ようするに立ち向かうつてことだな。あの、いけ好かない同級生たちがいただろ」

「やさしいトリオね。山田、佐藤、井伊田」

んばれ」と

「珍しい」

「きつと井伊田たちは、君のあの動画をネットに公開するだろうけど、そんなの気にしないでいいから」と言っていた。それを聞いた圭一君のほうは、『やっぱり、僕のお洩らしはみんなに観られちゃうんだ』とがっかりしていたけどな」

「そうしたら亨は？」

「いいこと言ってたぞ」

「いいこと？」

「まずな、『そんな映像、特別、面白くもないんだから誰も注目しないよ』と言った」

「それは正しい」

「だろ。で、『圭一君のお母さんは気にするかもしれないけれど、それだって、圭一君がしっかりしていれば、それほどショックは受けないよ』ともな」

「亨は鋭い」

「あとは、フランク・ザッパ(注)な」

「フランク・ザッパがどうしたんだい」

「どうやら、亨は、細見氏がよく口にする、フランク・ザッパ自伝からの言葉を引用したらしかった。つまり、こうだ。」

あのね、人間のやることの九十九パーセントは失敗なんだってさ。だから、失敗するのは普通の状態なんだ。フランク・ザッパが言うには、失敗するのを死ぬほど恐れているのは、自分を最高に恰好い(かっこいい)と思っている自惚れた人間なんだって。

「極端だけれど」前にその台詞(せりふ)をザッパから聞いた時にも、僕は同じコメントを口にした気がする。

「圭一君も同じことを言ってたな。極端だ、って。でもまあ、失敗するのは当然で、お洩らしくらいはまったく普通のことだ、と思えば楽になる」

「それで圭一君は、アクセルを踏んで、人生にライトを点けることにしたわけだ」果たしてそれで、井伊田たちが黙っているとも思えなかった。

「いったい、どうなることやら、だ」

「亨たちがどうなるかは、学校に行けない僕たちには分からない」

が、驚くべきことに、それから十分もしないうちに、僕たちは、「どうなるか」を知ることができた。

(伊坂幸太郎『ガソリン生活』(朝日新聞出版)より)

(注) フランク・ザッパ：アメリカのミュージシャン。緑デミと話をしている「ザッパ」は、望月家の隣に住む細見氏がフランク・ザッパの曲をいつも聞きながら運転しているところから、ミュージシャンと同じ「ザッパ」というあだ名がついた。

問1 傍線部1「圭一君は望月家の門までやってくると、数分そこでうろろし、インターホンを押すか押すまいか悩むそぶりを見せた」とありますが、ここでの圭一君の気持ちはどのようなものですか。解答欄に合うように五十文字以上六十文字以内で記しなさい。

問2 傍線部2「まあ迷惑と言えれば迷惑に分類できるんだけど」とありますが、ここでウィッツが言いたかったのはどのようなことですか。最適なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 多くの男性を惹きつける瑠奈さんと平凡な良夫では釣り合わず、良夫が恋人になってほしいと言っても瑠奈さんは困るだけだ、ということ。

イ 瑠奈さんに一目惚れした良夫は外見だけを見ているに過ぎず、人柄を見ようとしない良夫には瑠奈さんを好きになる資格がない、ということ。

ウ 良夫はファミレスで問題を起こした亨の兄であり、良夫が近づくことは、瑠奈さんのアルバイト先での立場を危うくするかもしれない、ということ。

エ 恋人のいない瑠奈さんが何かの間違いで良夫を好きになりかけているので、二人の関係がどうなるのかをはらはらしながら見守っている、ということ。

問3 傍線部3「飄々と」とありますが、本文中での意味として最適なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 渋々と イ ぼんやりと ウ イライラしながら

エ 申しわけなさそうに オ 何事もなかったかのように

つけて理解することがある。

イ 自家用車は自家用車なりの自尊心というものをもっており、それが傷つけられるとむきになることがある。

ウ それぞれに性格は異なっていて、お互いの個性がぶつかり合う会話を通して、「僕」の認識は深まっている。

エ 人間と分かり合い、持ち主の生活を最後まで見届けることはできないので、この世界に対する未練は捨てている。

オ 人間の世界に強い関心をもっており、常に傍(はた)から見ているからこそ、人間ならではの言動に気付くことができる。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

近代社会は、一八世紀のフランス革命から始まったと言われているが、簡単に言うところにいる皆さん、中学一年生から先生まで、1すべてが同じ「一」である、ということなのだ。あらゆる人は「一」であって、それ以上でもそれ以下でもない。一番わかりやすい例は、投票の構造だ。総理大臣も一票だしフリーターも一票。人はすべて同じだ、という捉え方をする。

しかし、近代社会が成立するまでは、全員が「一」ではない、現代からすればいわば不平等な社会だった。身分制度があったので、生まれたとき既に人生の軌道(きどう)が描かれていた。どの階層に生まれるかによって職業はほぼ自動的に決まったし、家庭をつくるにしても、相手は自分と同じ階層で周辺の地域に住んでいる人に限られた。つまり自分の生涯(しやうがい)のかたちはおおよそ見えていたのだ。自分で自由に職業やパートナーを選ぶなど考えられない世の中だったから、わざわざ自分の存在する理由を問う必要もなかった。その社会を、その共同体を、その家族を維持(きじ)するためには、その人がいなければならぬ。あらかじめ役割が与えられて生まれてきたから、自らの役割を果たすことが人生の目的だったのだ。

ところが、近代社会は「生まれ」、つまり階層、地域、言葉、性別、といった本人が選べない条件はすべて無視しようという考えを基本に成り立っている。生まれは関係なく、みんな同じスタートラインに立ち、同じ条件で勉強を始め、平等に扱われる。その代わりあとは自分で選べなさい、と放り出される社会だ。そうするとどうなるか。今ある自分は自らが選択した結果なのだからすべて自分の責任だ、ということになる。

問4 傍線部4「水が垂れているようなものだし」について、このことは、やさしいトリオの側から見ると、どのようなものであると緑デミは思っていますか。その答えとして最適な語句を八字で抜き出さなさい。

問5 空欄Xに最適なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア で、からかった。えいえいおう

イ で、からかった。のりくらり

ウ で、からかった。やいのやいの

エ で、からかった。くわばらくわばら

オ で、からかった。えっちらおっちら

問6 傍線部5「俺たちは運転手にアクセルを踏まれば前に行くが、人間は前に行きたくても、自分で自分のアクセルを踏まないといけない。決心するにも自分ひとりじゃ無理な場合があるわけだ」とありますが、ここでザッパが言おうとしているのはどのようなことですか。次の中からふさわしいものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア 人間は他人から応援してもらうことによって、前へ進む勇気をもらうこともある。

イ 車は運転手の命令によって前進するので、前進するべきかどうかを迷うという感覚はない。

ウ 正しい道を判断することが難しい場合、人間はナビゲーションに頼って機械任せにすればよい。

エ 車は、バッテリー切れなどの様々なトラブルで走れなくなってしまうので、あれこれと手間がかかる。

オ 人間は、普通進むべきかどうかを自分で判断するが、結果的に間違えることもあるので、何かと迷う。

問7 本文中での自家用車の描かれ方として不適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間とは常識や感覚が一部ずれており、人間の世界を自分たちに引き

近代社会は理念として全員が同じ重さだという思想に基づいている。ほんとうに全員が一票を持つことができたのは二〇世紀に入ってからであるし、いまだに差別はなくなっていないが、この理念を守り続けようとしている。確かにたいせつな考え方だが、だれもが、自分はこういう存在でありそれを意味のあるものとして肯定できるか、という問いに向き合わざるをえない。近代社会は、ものすごく重いことを一人ひとりに要求しているのだ。

そんな大きい責任を課せられている今の時代であるにもかかわらず、若い人に限らず、2すべての世代が、どんな無力になつていても私は感じてい

る。大げさな言い方だと思ふかもしれないが、では、この中に、お産のときに赤ちゃんを取り上げることが出来る人はいらるだろうか。恐らくaカイルだろう。へその緒はどの辺りで切るか、とか、産声を上げさせるにはどうすればいいとか、まったく知らないはずだ。昔は、こういったことは女性であれば全部できたのだ。

また、私の親の世代くらいまでは、生涯一度も病院に行つたことがない人がかなりいた。大抵の病気であれば、自分で治す総合医療という文化があつたからだ。例えば、胃が痛いときに飲む薬草や痛みを和らげるツボといったようなことを知つていたし、応急処置はだれでもできた。

人にものを教えることも、うまくできなくなつていく。教育は学校の責任になつた。どうやって排泄物が処理されているか、だれも知らない。下水道が勝手に流してくれるからだ。人が死んだときの処理はどうだろうか。体中からあふれてくる体液を、昔はそれぞれの家庭できれいにし、葬式を出していたが、今では病院と葬儀屋にお任せだ。最低なのは、隣近所とのめめ事が起こったとき、それを解決する能力すらない。すぐに役所に電話したり、何かというと弁護士に頼んだりする。

出産、調理、排泄物の処理、治療、看護、教育、子育て、交渉など、生きるうえで欠かせない事柄を、私たちは知らないうちにすべて、他人に任せようになつた。少しでも安心で安全に暮らせるように、とそれぞれの「プロ」を育ててきたのだ。普段の生活のことは行政やサービス会社に任せておけば安心、安全だし、病気になるればしっかりと治療を受けられる。子どもは学校で勉強するようになったし、めんどうなめめ事は弁護士に頼めば損はない。排泄物はペダルを踏むだけできれいになるし、介護が必要なら電話をすればいい。

えたいことがあつてもストレートには言えないから、別の言葉に置き換えてカムフラージュしていることがある。私が伝えたいと思つている相手がなかなか気づいてくれないからいら立ちながら書いていくとか、そういうことがある。読むだけではわからないし、そのときの気分を忘れていくから、後で読み返しても表現の意味がわからないこともある。文章はそれくらいデリケートなものだが、その答えを一つに絞ろうというのだから、ほんとうに不思議だ。

けれども世の中には問いと答えが一对一の問題は、めつたにない。「光は波動であるかbリユウシであるか」という大論争があつたが、これは正解が二つある例だ。光は波動であることも正解、リユウシであることも正解。両者は物質としてのあり方が違うから対立するのだが、どちらも正解として考えられている。

また、一つの問いに二つの不正解がある、つまり二つしか解はないが、そのどちらの間違つていようという例もある。「世界に果てはあるかどうか」という問いを考えてみよう。世界に果てが「ある」というのは間違いだ。なぜなら、果てがあるならその先はどうなつていくのかという問いがまた生まれから断言できない。一方、世界に果てが「ない」とも言えない。根拠がないからだ。無限遠点をまだ確認できていないというだけのことかもしれない。そうすると、果てが「ある」のも「ない」のも正解にはなりえない。

それから、生きるこの意味、自分がここにいてこの意味はどうだろう。そんな問いに対する答えは、ない。4問うことそのものが、答えの意味の大半を占めている。自分がだれであるかなんて、人間にはとうてい答えることができない問いだろう。

無力な状態から脱し、自分の問題を自分で考えて、責任を負うことが出来るようになるために、私たちは、「一つの問いに一つの答えがある」という考え方をやめなければならぬ。物事は、こちらからはこう見えるが、後ろから見ればこんなふうだ、といういろいろな補助線を引きながら考えよう。みんなが一方からしか考えられなくなつていくときに、別の方向から見ることがたいせつだ。例えば、自分の苦しみを打ち明けて絶望する友人に対して、いやそれだけではない、こういう考え方もある、と別の補助線を示せる「頼れるやつ」になろう。

自分の生きている意味を考え、思い悩むこともあるだろう。問いが大きす

生活のあらゆる面でそれぞれプロがいるから、なんの不安もない健康でいられる。寿命が延びたことからうかがえるように、プロを育てたことは社会にとつて間違いなくプラスになった。ただ、プラスは必ずマイナスを含んでいるもので、プラスの分何をしつたかという、われわれ自身の能力だ。一人では何もできない無能、Eggheadの状態になつてしまった。

そんな私たちが今の社会でできること、それはクレームをつけることだけ。行政にも会社にも、少しでも不満があれば文句を言う。これだけは自信を持つてできる。なぜか？ お金を払つている、義務を果たしている、と主張できるからだ。払つた金額に見合うサービスを受けるべきで、かなわなければ文句を言え。しかもそれを当然のように言う。皆さんも、授業がつまらなかつたり成績が下がつたときに、ちゃんと授業料を払っているのにこの頃の先生はサービスが低下している、などと言つていなければよいのだが……

近代社会は、全員が責任を持った「一」である市民社会をつくらうとしていたはずなのに、結局私たちは「市民」ではなく、「顧客」になつてしまつた。市民とは、自分たちの大事な問題は自分で判断し自ら担う主体を意味する。私たちは、自分たちの安心と安全のためにプロを育て、「委託」するという道を開拓してきた。しかしその制度の中で暮らすうちに、自分が持つ技や能力を磨くことを忘れてしまつた。自分で物事を決めて担うことができる市民ではなくなり、ただのサービスの顧客に成り下がつたのだ。

(中略)

政治、ケア、表現活動といった人生に非常にたいせつな局面でほんとうに必要なとされるのは、一つの正解を求めることではなく、あるいは正解などそもそも存在しないところで最善の方法で対処する、という思考や判断力なのだ。

今の学問についても、同じようなことがある。中学や高校では、一つの問いには一つの正解があたりまえ、という前提で勉強する。私の書いた文章もよくマークシート式の試験に使われて、「筆者はこの段落で何を言いたいのか次の四つの中から選べ。」などといった問題になる。私もこれに挑戦してみるのが、3自分の文章なのに解くことができないことがある。四つの選択肢のうち、二つには確かに私の言いたいことが書かれている。自分でも選びきれないが、そんな問題に対して皆さんはちゃんと一つ、私の代わりに確定してくれるわけだ。文章をつくるとき、いろいろな思いを込めている。伝

ぎて、知的体力が足りずにだれもが倒れそうになつてしまふ。そのとき、行き詰まつた思考回路をひっくり返せるかがc肝だ。糸口はたくさんある。

普段、自分が「生まれる」という言葉を使う。考えが進まないときに、「ところでこの言葉はほんとうに正しいのだろうか」と、本題の外に立つてみてほしい。すると、生を自分の出来事のように語るが、よく考えればこれは受け身の言葉であることに気づくだろう。つまり「生まれる」ということは自分だけではなく他人との間に起こつた出来事なのだ、少し視野が広がる。相手の身になつて問いを考え直すと、歯が立たないと思つた問いも、違う見え方になるはずだ。文学や芸術作品も、同じ苦しみの中から生み出されたものだから、いろいろな補助線を与えてくれるはずだ。

それから、投げ出さずに考え続ける、いわば知的な肺活量も持つてほしい。理解はあるとき一瞬でできることでは決してなく、じつと考え続けて到達できるものだ。それだけでなく、考えるうちにまつたく別の、5のつびきならぬ問題が現れてきて、そのことによつてほかの問題も全部問い直さなければいけない、ということもしょつちゅうだ。哲学という学問がまさにその連続なのだ。私もある問いを突き詰めていたとき、突然世界がめくれ返つて、「これがわからない」ということはあの問題はわかつているつもりだったが、実は根拠がなかったんだ」と、すべての問題をもう一度考え直す、ということもあつた。

なぜ生きているのか、自分の存在は何なのかという大問題に、答えはない。大昔からみんな考え続けていまだ答えられていないのだから。例えば、心と体の関係はギリシャ以来、二〇〇年以上以上哲学者が考え続けていて、まだその答えは出ていない。それでも大昔からその問題に食らいついて問い続けてきた。その結果としていろいろな思想や芸術が生まれ、文化が豊かになつてきた。たいせつなのは、問い続けることにある。

自分自身の問題や世の中に起こる出来事は、理由や意味がわからないものがほとんどだ。また、科学の極限的な問題や、社会生活で重要な問題、生きるうえで重要な問題というのは、ほとんどが複数の解を持つていたり、正解が一つもなかつたり、そもそも答えがない、というもののばかりだ。だから、自分の持つていく狭い枠組みの中で無理やり解釈して、わかつた気になつても何も解決しないし、とても危ない。必要なのは、わからないことでもこれは大事、としつかりと自分で受けとめて、わからないままにずっと持ち続けることなのだ。そして何度も体当たりして痛い思いをして、問題に正確に対

処するすべを身につけよう。「6頭がいい」と「賢い」とはなんの関係もない。じくごくにいろいろな補助線を立てて、誠実に考え続ける、「賢い」人になつてほしいと心から願っている。

(鷲田清一「賢くある」ということ)

(『何のために「学ぶ」のか』所収)「筑摩書房」より)

問1 傍線部 a・b のカタカナを漢字に直しなさい。c はその読みを平仮名で記しなさい。

問2 傍線部 1 「すべてが同じ」「一」である」とはどういうことですか。その内容として **ふさわしいものを次の中から三つ** 選び、記号で答えなさい。

- ア 誰もが、職業選択の自由を与えられるということ。
- イ 誰もが、定められた役割に応じて、共同体を支えること。
- ウ 誰もが、選択した結果が平等になるように責任を持つこと。
- エ 誰もが、自分自身の存在について肯定的に考えられるということ。
- オ 誰もが、同じ階層の人の中から自由にパートナーを選ぶこと。
- カ 誰もが、社会から与えられた役割を、きちんと自覚すること。
- キ 誰もが、選択の権利を平等に与えられ、その結果に責任を負うこと。

問3 傍線部 2 「すべての世代が、どんどん無力になつていっていると私は感じて

責任

問4 傍線部 3 「自分の文章なのに解くことができないことがある」のはなぜですか。 **不適当なものを次の中から一つ** 選び、記号で答えなさい。

- ア 必ずしも一つの思いだけではないから。
- イ 書いている時の気分を忘れることもあるから。
- ウ 意図を隠して別の表現で書いている場合もあるから。
- エ 後で読み返した時に初めて意図はわかるものだから。

問5 傍線部 4 「問うことそのものが、答えの意味の大半を占めている」とはどういうことですか。最適なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 生きるということとは不確定な状況で考えることであり、最善の方法を見つけることはできないということ。
- イ なぜ生きるのかという問題は、二〇〇〇年以上考えられてきているものの、わからないものであるということ。
- ウ 生きることの意味のように答えのわからないものでも、重要だと思えば考え続けることが必要であるということ。
- エ 生きることは、思い悩み、行き詰まることの多い苦しいものであり、よりよく生きる方法を常に考える必要があるということ。

問6 傍線部 5 「のつびきならない」とありますが、本文中での意味として最適なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア どうにもならない
- イ どうしても分らない
- ウ どうしても動きが取れない
- エ どうしてもやらねばならない

問7 傍線部 6 「頭がいい」とはどのようなことですか。最適なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 学校の試験問題で最も適当な記号をきちんと選べること。
- イ 問題に対して様々な考え方で取り組むことができること。
- ウ 一度考えたことについても根本から考え直すことができること。
- エ 答えのない問題についてそれを受け入れて考え続けられること。

[illegible]